2　学び直しシンポジウム

－学び直しシンポジウム NEXT－

「福祉改革という福祉実践」

【場所】2010年 3 月 7 日（日）　10:00～12:30　松本大学

【話題提供者】	長野県歯科医師会	監　事	村居　正　雄　氏
	山形村社会福祉協議会	社会福祉士	田中　雄一郎　氏
	ウィメンズサポート	代　表	六井　洋　子　氏
【指定討論者】	企業組合カスタムラボ	代　表	笹井　俊　一　氏
	松本市社会福祉協議会	地域福祉担当係長	高田　克　彦　氏
【コメンテーター】	長野県社会福祉士会	副　会　長	村岡　裕　氏
【司会・進行】	松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科　准教授　尻無浜　博幸　氏		

尻無浜／皆さん、おはようございます。これから松本大学「学び直しシンポジウム NEXT」を開催したいと思います。

今年度のテーマは「福祉改革という福祉実践」と設けました。話題提供を3人の方からしていただくことになっています。今まで地道に取り組んでこられた、その中からひょっとしたら今の時代だからこそ、大事にしなければならないことがあるのではないか。そういう前提のもとで、「改革」という位置づけをしました。

今日、司会進行を務めます松本大学の尻無浜です。よろしくお願いします。

話題提供をして頂く前に、本日、コメンテーターの村岡さんにご挨拶と、また少し最近の動向等を含めて、まずはコメント頂けたらと思います。

では村岡先生、よろしくお願いいたします。

コメンテーター村岡裕氏　あいさつ

村岡／皆さん、おはようございます。ただ今、ご紹介いただきました村岡と申します。社会福祉士会の副会長をさせていただいております。

このあと、様々な実践のご発表を皆様のほうからされる前に、私から今なぜ、様々な実践が必要か、そういう現状に至った背景ですとか、最近の動向、特に今回のパンフレットに、社会福祉士及び介護福祉司法の法改正のことも若干触れられていますので、それに関することを10分ほど申し述べたいと思います。

今回のパンフレットを見ていますと、「福祉実践」という言葉が書かれています。改めて、福祉実践が必要とされる社会状況を振り返ってみますと、大きく分けると 2 つあると思います。 1 つは戦争。戦後には福祉実践が必要になるということがあります。それともう 1 つは大災害。近年は非常にこれがわかりやすい形で、世界中のあちこちで起こってしまっています。改めて、日本の場合を振り返ってみますと、先ず、戦後の混乱期であった時に、憲法25条が、社会福祉のもとになったというふうに言われていますが、行政責任としての措置制度に代表されるような、いわゆる「公（おおやけ）」です。「公」を中心とした福祉が戦後スタートしたということです。具体的には、児

童福祉法とか、身体障害者福祉法です。そういう法律ができてきた中で、社会福祉事業法という施設の種類や基準を規定する法律ができまして、そこでは、実践の場として、行政と社会福祉法人、今の私が所属しているのも社会福祉法人ですけれども、そういう場で福祉実践が行われてきた。つまり戦後の混乱期には、社会福祉事業法と社会福祉法人というのが１つの担い手としてあったということです。

それから約50年たった、1995年頃だったと思いますが、阪神淡路大震災ここでやはり、また福祉実践が必要になったわけですけれども。そのときの社会の中でどういう福祉のニーズがあったかというと、社会的に孤立している人です。これは独居の高齢者の方々の問題なのだと思います。それから社会から排除されている人が、福祉の手が差し伸べられなかったというような中で、誰が活躍したかというと、市民のボランティアの方々だったわけです。

これはある意味では自主的な地域組織に代表される民の活動ですね。戦後の「公」に対比していうと、「民」の活動が中心であった。そこで何ができたかというのが、これが特定非営利活動促進法。つまり通称 NPO 法なのです。そういう風に考えますと、今の発言したことをまとめますと、施設を中心にして公が福祉を担ってきたという時代から、それらに加えまして、地域を中心とした民が福祉を担うようになった、そんな変化があったのではないかというふうに思っています。

そういう状況が今も続いているわけですが、この社会福祉士及び介護福祉士法の改正の中で、実は注目すべき点があるというふうに思っています。それはカリキュラムの中に、組織の経営管理というのが、新たに加えられているわけです。従来、福祉の実践者というのは、どちらかというと施設という機関の中にいて、そこで社会福祉援助技術などの、いわゆる社会福祉の専門性を発揮することのみが、それが主たる仕事であり、そこが期待されている役割だったと思うのですが、今のような地域で、民間で福祉をすることが、相対的に多くなってきた時代には、例えていうと NPO のような組織の中で、経営ということも意識しながら、実践活動の輪を広げていくという、そういうことが期待されているのではないかなと思います。

従来学生さんたちも、福祉の仕事をしたいというと、例えば老人ホームに勤めたい、児童養護施設に勤めたいとか、病院のメディカルソーシャルワーカーになりたいという、いわゆる施設のイメージですが、果たしてそうかというと、そうではないのではないかと思います。つまり、そういう場もありますが、地域の NPO だとか、もっというと民間の事業の部門に福祉の部分があるのではないか。そんなふうに今の時代は変わってきているのではないかと、そんな風に思っております。

そういうわけで、実は今、福祉の仕事の場というのは、非常に多岐に渡って存在していて、かつそこで活躍するということは、実は経営的に物の見方ですとか、技術というのも必要とされるのではないかと、そんなことを感じています。最初にこのような難しいことを申し上げましたが、そんなことを、実践の場でどのようにされているのかというのも、私も非常に興味を持っております。今日、そんな話を聞ければというふうに感じております。

冒頭の発言は以上とさせていただきます。

尻無浜／ありがとうございました。

それでは早速、話題提供をさせて頂きたいと思います。一番最初に御登壇頂くのは、村居正雄さんでいらっしゃいます。

村居さんには、「国際協力に学ぶ」というテーマをお願いしてあります。村居さんは、歯科医師さんをしていらっしゃいまして、1973年、上田に歯科の診療所を開設され、ついこの頃それを閉じられました。歯医者の先生を地域でしながら、国際協力にも出かけていらして、その様な中からの取り組みの話が今日はうかがえるのではないかと思います。

それでは、よろしくお願いします。

話題提供① 村居正雄氏

村居／おはようございます。

ご紹介ありがとうございました。上田市からやって参りました村居と申します。ご紹介いただきましたが、去年67歳になりまして、もう60歳を過ぎたら、診療所をやめようと思っていたのですが、なかなか辞められなくて、2年くらい、準備期間がありました。もちろんその前からずっとそういうことは考えていましたので、辞めるエネルギーがとてもいるなと、しみじみ感じています。

私が、最近やって来たことをお話ししながら、私自身が福祉を受ける年齢になっていますので、国際協力と福祉とがどう結びつくか悩みましたが最後の所まで話を聞いて頂ければ、結構共通点があるということをわかっていただけると思います。

私が歯科の専門ということでありまして、大学を卒業して小児歯科をずっとやってきました。私は昭和42年に大学を卒業したのですが、三歳児の虫歯というのは、昭和44年頃がピークです。その頃は80%以上の子どもが1人5本以上の虫歯を持っていました。それがどんどん減っていくわけです。

私は昭和48年に上田市に行きましたけれども、結構、地域の先生方は虫歯予防に熱心でして、長野県の市町村の中では、上田の虫歯罹患率というのはかなり早く下がり始めたわけです。上田以外の所を含めてそうかな。実はこれは全国的な動きなのです。

なぜ昭和44年頃にピークになり、どんどん下がっていったかということです。昭和44年が虫歯の罹患率が86%ですね。それがどんどん下がっていくわけです。今日、若い方も大勢いらっしゃる。年配の方もちらほらみえる。日本の背景を見ますと、昭和39年、東京オリンピックがありました。ちょうど高度成長の時代です。実はそれに合わせるように、様々な公害が全国で起こってきます。水俣病などももちろん、この時期にクローズアップされるわけです。

虫歯が子どもの虫歯が多いということが社会問題になりまして、当時の文部省も、そういういろんな苦情に対応する形で、私が卒業するときに歯科大は8校しかなかったのです。その後どんどん、この近くの松本歯科大も含めて、国立大学もできまして、現在29校あります。8校が29校になったので、6年後くらいからどんどん卒業するので、現在は、歯科医師は過剰。医者のほうは足りない、足りないと言っていますが、歯科医師は多すぎるそういう時代になりました。

オイルショックの頃なのですが、48年に私が上田に帰った頃から、どんどん減り始めるのです。80%台だったのが、70%、60%台とどんどん減ってくるわけです。

減っていった中で、私はオイルショックいうのは非常に、それまで豊かになるということで、みんなうきうきしていたのですが、これはいけないと良い一般の人が、生活を引き締めるきっかけになったわけです。歯医者に行っても見てくれない。それから差額を取られるという話がありました。それから当時厚生省、1歳6ヶ月検診をして、3歳になる前からいろんな予防指導しろと。小児歯科はそれまで非常にマイナーでしたが、それを標榜として認める。子どもを一生懸命やる先生を増やそうと。一生懸命やった先生には、ご褒美に診療点数は1.5倍にしますよというような制度ができてくるのです。そうすると、さきほどのような虫歯の現象が加速されていくわけです。

次は、結核です。18世紀産業革命の頃のロンドンでは、人口1万対比、だいたい100人くらいの人が結核で死んでいったわけです。それがどんどん減っていくわけです。ローベルト・コッホが、

それが感染症で結核菌というばい菌によって病気が広がっていくというのを初めて発見したのが、1882年です。ロンドンで産業革命の頃ですね、ロンドン市内は煤煙でほとんど毎日曇り空。働いている人たちも、悪い環境の中で仕事をしていた。そういう時期に結核が蔓延し、しかもそれは死に至っていた。どうしてここで減っていくかというと、やはり人々が生活の改善を始める。もっと空気をきれいにしよう。栄養の問題、住まいの問題、いろんなことが社会学者からの提言で、だんだん改善されると、結核で死ぬ人が減っていくわけです。当時は抗生物質などはありませんから、結局自然豊かなところへ転地するしか治療法がなかったわけです。

つまり病気というのが、社会背景によって増えたり減ったりするということを、非常によく表わしているわけです。立川先生という方が、『病気の社会史』という本を書いています。例えばコレラやペストが蔓延する。それには社会的な要因があるのです。ペストは、蒙古の西進、西の方に蒙古がどんどん攻め続けていったのですが、その軍隊が進むのと一緒にネズミも動くのです。ネズミにくっついているノミがペスト菌を運ぶわけです。それでどんどん西の方にペストが入ったわけです。あるいはコレラは、インドの地方病だったのです。イギリスがインドを植民地化して、そこで罹った人が、ロンドンに帰る。そこでコレラが流行る。それがまた、世界中に散らばるのですね。梅毒も同じです。南米で始まったのが、世界に広がる。

あるいは逆にインフルエンザなどの病気も、西洋諸国の植民地化によって南米で広まる。インディオがたくさん死んでいくのです。それからオーストラリアの原住民も死んでいくのです。こういう社会の大きな変化と病気を重ね合わせて考える必要がある。

私は20年前から国際協力をしていまして、たまたまここ12年くらいはミャンマーに関わっています。ミャンマーというと皆さん、軍事政権が怖いと思われるかもしれません。実は日本とは、結構深い関係があります。

場所は、このインドシナ半島のタイとベトナムと、それからバングラディッシュ、インドに囲まれたところです。1941年ですかね。日本がハワイの真珠湾攻撃と一緒に南の方へ下り、ビルマはイギリスの支配下にありましたが、日本が解放した形になるのですね。アウンサン将軍は、日本の陸軍兵学校を卒業していますけれども、彼が独立運動をするときに、日本が支援する関係です。インパールの作戦の中で、日本人は20万人くらいビルマで死んでいるのです。そういういろんな関係があります。

首都のヤンゴン、昔のラングーンです。イギリスの占領時代の古い建物、それから最近できた建物。新しいところと古いところが混在しています。慰霊碑もあちこちにあります。

国際協力は1998年から始まるのですが、国際協力する場合必ずしなければならないが、どういう協力をするかということを、現地の政府の方と覚え書きを交わす。私が恵まれたのは、ジョーミン先生が今は厚生大臣なのです。ですからいろんな関係で、私は、幸運だったなというふうに思います。

歯科医師会あるいは歯科大学の先生達がリーダーシップを取っていますので、そういう人たちと打ち合わせをして始めるわけです。歯科のほうから入りますので、歯磨き指導から始まります。ラオスも同じようにしています。

現地の人は水をどこからかもってきて、それを横に置きながら歯磨き指導を受けるわけですね。現実問題として、水が本当に貴重なのです。水場から、水のタンクを持って町に売りに行く人たちもいます。ごく一般には、ヤンゴン市内でも雨水をためて使います。どろどろです。こういう現実を見ると、歯磨き指導をすることと、安全な水をその人たちに提供するのと、どっちが大事だという話になります。そういう気づきがないと、こちらからの一方的な援助ということになります。

私は学生達も連れて、スタディーツアーをするわけですけれども、やはり地域診断能力というのを、しっかりそういう中で感じ取って欲しいなと思うわけです。これは地域で、日本で、どういう医療を提供するかということをする場合も全く同じですね。

どんどん私たちの活動は変わっていきます。井戸掘りが専門になっています。ところが井戸から汲みあげるポンプの油をどうするかとか、またそこからいろんな問題が出てきます。それから何百個と水道タンクを作りました。先行施設ですね。きれいになると子ども達は自然に喜んで歯磨きをするようになるのです。そのうちに気づいたのはトイレです。

ユニセフなどにもいろいろ話しますが、トイレの問題というのは問題が実は大きいです。時間がないのであまり詳しく話しませんが。思春期になると、女の子は学校に行くのをいやがります。なぜかというと、トイレの場所が悪いからです。

先生用、生徒用とトイレもたくさん作りました。ところがネパールもそうですが、不浄の場所で、それは家から遠いところに造るわけです。雨の日なんかだと大変です。ちょっと想像しただけでもわかります。結局、渡り廊下を造らなければということになります。

これは、問題発見問題解決能力ということです。何が問題なのか。トイレを作ればいいのか。それは利用してもらわないといけない。

これはネパールの例ですが、トイレ用のコンクリートの建物を造ります。次の年に行くと、そこが薪の格納庫になっている。人々はやっぱり、外で道ばたでウンコやオシッコをするのです。

その人達にとっては、薪が湿らないようにする場所が非常に必要なのです。だからトイレがトイレとして用を足していないのです。

先だって、私たちが造った学校が、例のサイクロンでかなり壊れました。トイレだけ残っていて、校舎は跡形もなくつぶれているという現実がありまして、これも笑うに笑えない。

それから山の中ですね。ごちそうが出て大歓迎なのですが、なんとか、ここにいるミャンマーの人たちと一緒に山の中の村を訪ねました。この地区は三種ですが、歯科医師会にお願いして、検診と簡易診察の上でほとんど抜糸なし。少数民族の人は待っていても、挨拶に来てくれれば治療を受けたいという人がいっぱいです。

私たちが年に１回、２回行くのではなく、その国の人たちに、きちんと自分の国のことを考えて欲しいということを、いかに考えさせるかですね。

私がお話ししたかったことですね。病気が増えるとか減るとかは、時代背景とか生活環境が強く影響している。それをきちんと捉えないで、ただ口の中だけ見ている。結核も虫歯も細菌感染ですね。実は。細菌感染でも時代にあるいは生活背景で、増えたり減ったりするんだという、そこの視点を忘れてはいけないと思います。

歯磨きは大事ですけれども、でも下痢などでどんどん人が死んでいるのに、はみがきもないだろうという、そういう気づきは必要ですね。

それからトイレも、こちらは補助金をもらってトイレを作りましたと、報告書を書くわけです。箱物のことが書いてあればそれで OK ということになりますが、それが薪置き場になっているかも知れないという現実があります。ですからちゃんと使われているのかどうか、その人たちが本当にトイレを望んでいたのかどうかという、検証も必要です。最終的には、そういった支援を受ける人たちが主役になる、あるいは自分たちの努力でどのように現状を改善していくかという気持ちを起こさせるということが大事なことかな。それを、今日お集まりの皆さん、福祉の関係の方、学生さんも含めて、大勢いらっしゃるわけです。そういった視点を、是非、それぞれの現場で生かしていただければと思います。以上で私の話題提供を終わらせていただきます。

ありがとうございました。

尻無浜／しばらく質問等の時間がありますので、皆さんの方から、質問、コメントがありましたら、

あげていただけたらと思います。先生のご専門は、社会歯科学です。僕も初めて聞きました。話の中で、歯磨きよりも安全な水。しかも先生は、歯磨きの指導をしたいのに、でも歯磨きよりも安全な水ということを、歯科の先生がおっしゃるのですね。それを先生は地域診断能力を磨くというところで、まとめていらっしゃいます。その辺ですね。専門家は専門の領域をすると言うのがありますが、その辺の所というのは結構奥深い、経験知だったのかなと私は思いました。

今日は、国際協力という、たぶん、地域というような概念に置き換えて捉えていただくとわかると思います。遠いミャンマーとかネパールとか、遠い国の関わりというのではなく、われわれが普段地域に関わる、そういうような関わり方という位置づけをすると、ちょっと飛行機で時間は10時間かかるかもしれない。新村は歩いて10分かもしれないが、ひょっとしたら関わる視点というのは、同じことなのかなということを、先生がおっしゃっているのではないかと私は思って聞いていたわけです。

皆さんは、いかが思われたでしょうか。もしご質問等があればと思いますが、いかがですか。

白戸／松本大学の白戸です。

実は、村居先生は10年以上前になりますが、僕は元々国際協力の仕事をしていたので、それで初めてお会いしたのです。お会いする前は、こういう歯医者さんの国際協力というと、お金持ちがそこに行って、何となくいやだなという感じでうかがったのですが、お会いしてみたら全然違いました。

それで先生が最初に言ったのは、歯医者が口の中だけを見ていたら、むしろその国の健康状態を悪くするかもしれないとおっしゃったのです。僕はそれですごく魅力を感じていました。

今日、村居先生にいらしていただいたのは、そういう目から見て、目の前の人を見ずに、障害を見たり、状況を見たり、あるいはケースに当てはめてこうする、その人が何を望んでいるか、どう生きているかということをあまり見ないで、何かをやってしまうところが、僕は多々あるのではないかと思っていました。村居先生は口の中を見るのではないのだと。口の中から見える物を見るんだということをいつもおっしゃっていて、そういうところを今日はお話し頂ければなと思ってお願いした次第です。

実は、村居先生、歯医者さんというのは、抜く、削る、かぶせる、この３つをすると点数が付いて大変儲かると言われています。村居先生の所に僕も何回か伺うのですが、村居先生の患者さんは、ほとんどそういうことをしない人たちなのです。先生の言い方によると、自己管理ができているから必要ないとおっしゃるのです。１週間、２週間、年に２回か３回、海外に現役の頃から先生はいらしていたのですが、普通そういうことをすると、患者さんは急に歯が痛くなって、よその歯医者に逃げてしまいますよね。でも村居先生の所は、「僕の患者は自己管理ができているので、急患がいないので、１週間、２週間居なくてもかまわない。」とおっしゃるのです。あるいは娘さんがいらっしゃるのですが、「うちの娘は僕の仕事を理解して、栄養士になってくれた。虫歯を治すことではなくて、虫歯を予防する仕事に就いてくれた。」とこういうことをいっていると、たぶん、だいたい今日の村居先生にお話し頂いた趣旨がわかると思います。我々が翻って福祉の現場で、そういう視点で物を見ているか。そこの所を少し考えていただきたいということで、今日は、村居先生にお願いした次第です。

尻無浜／次の話題提供者は、田中雄一郎さんでいらっしゃいます。山形村社会福祉協議会、地域福祉の活動エリアの部門責任者です。そこに経歴をご紹介ありますが、最初に山形村の職員で入られたのですが、福祉の仕事を行政マンとしてやられ、その後、村の職員を辞めて社協に入り直したという、世間一般からするとちょっと異質で、そんなことを普通はしないだろうということをなさって、社協にお勤めしていらっしゃる方です。

一昨年でしょうか、社協が建部の里という宅老所を造られて、そこの創設からたずさわっていらっしゃいました。そういう経歴を持たれた方です。
それでは、よろしくお願いします。

話題提供② 田中雄一郎氏

田中／山形村社会福祉協議会の田中と申します。

私自身、山形村の役場に勤めて、５、６年くらい前に社協職員になりました。ですが自宅は新村でございまして、ここから歩いて２分以内で来られるところから来ましたので、今日は歩いてくればよかったのですが、雪が降っていましたので車で来させていただきました。

私のほうでは今回の趣旨から、山形村で現在行っている活動を紹介させていただいて、社会福祉協議会として、社会福祉協議会というのは地域の中で、福祉の専門職が集まっている集団なのかと考えています。専門職の集団として、やらなければならないところも最近、遅まきながら取り組みだしたというところで、その辺のお話しができればと思います。

今回私が発表させていただく部分は、障がい者の就労に関する取り組みという所の中での、フランス鴨の飼育というのを今年度やってみまして、それについての発表をしたいと思います

もう１つが、実際地域の中で質問されたことなのですが、どうして社会福祉協議会でフランス鴨をやっているのかというあたりを聞かれたので、そのあたりについての発表ができればと思います。まず山形村についてですが、松本市の西側にありまして、だいたい面積が25㎢で、うち半分が山林で、実際住宅とかがあるのは12㎢ぐらいです。よく説明するのは、役場から半径２㎞くらいで全部の家に行けるので、非常にコンパクトな村です。それで人口は8800人で9000人弱です。私が役場に入ったときが平成７年で、７年のときは確か7000人台だったと思いますので、すごく人口が増えている。若い村なのかなと思っています。

障がい者就労に関する取り組みは、社会福祉協議会のほうでは、地域の方と一緒に活動しているぽぽネット企画という活動の中で行っています。

ぽぽネット企画がどういうものかと言いますと、社会福祉協議会の中では地域福祉活動部会として位置づけさせて頂きまして、有志の方々が活動によって出たり入ったりしながら、地域の課題に取り組んで行くという住民組織でございます。10人ほどのメンバーで構成されています。「10人ほど」と言っているのは、実際のメンバー数がちょっとわからなくて、会長というかトップの方だけが決まっていて、その時々の内容によって協力して頂ける方には協力を頂いているというような形で活動しております。

これまでの活動例ですが、平成15年頃、白戸先生にもご協力いただきまして、山形村は長芋の産地でして、その長芋から出てくる「むかご」を自分たちで取って、それを売って地域に還元しようということで活動したのがきっかけでございます。

お子さんが取ったのを、包装しまして、それを売ります。売ったお金で、村の児童館に遊具を寄付しましたというような活動を行っております。このむかごの販売については、平成15年から２年ほど行いまして、今現在はむかごは取っていないのですが、あれをきっかけに比較的むかごというものが、村の中でも捨てるものではないというとらえ方をされてきたような気が致します。

現在は、年間を通じて収入を得ていくにはどんなことをすればよいかということを、１つのテーマとして、その収入を得るための活動を考えようということで行っています。今回のその中で出てきたのが、フランス鴨の飼育でございます。

まだ、私たちが考える障がい者の方の就労支援という形になるかと思いますが、就労支援とフランス鴨の飼育というものについての説明、私たち自身が考えている部分をご説明させて頂きます。

障がい者の方の就労支援は、まず１つは労働に見合った賃金を得ることができるような働き方、メニューを探っていく活動かなと考えています。大前提としては年間を通して収入を得る活動を模索することがまず一番なのかなと考えております。この辺は、障がい者の方も今、施設から地域へという方向になっている中で、地域に障がいをお持ちの方が増えます。ただ増えて、家で生活していけば生活できるのかというと、そんなことはなく、どうしても生活する以上お金がかかってくると思います。社会福祉協議会というのは、非常に福祉関係が手広いところでして、福祉でお金を貸したりしているのです。生活資金とか、そういう話もありますし、いわゆる権利擁護事業という形で日常生活自立支援事業として、障がい者とおつきあいする機会があります。こういう活動をしていてつくづく思うのは、バリアフリーという点でいくと、お金というのは非常にバリアフリーなのだと思ったりするわけです。障がいをお持ちの方の持っている1000円は、1200円になるとか、障がいをお持ち方がどこかに行って２万円分の商品券が１万円で買えるとか、そういう世の中ではない以上は、障がいを持っていてもいなくても1000円は1000円なので、その1000円をいかに使って生活をするかというのが、生活をする上で一番肝心なところだと思っています。

今までというのは、年金の中で生活をしていこうというお話しが主だったと思うのですが、年金というのは限られていまして、生活の中で必要な分しか年金の額は出て来ないと思います。一番は20代、学生さん達の年齢でもし障がいになったときには、20代前半で例えば月に５万５万でやっていけるかというと、やっていけても遊べないのかなと思います。今回、就労をやった私自身のきっかけというのは、やはり年齢相応の無駄遣いができる収入を得るというのは、すごく生活をする上で大事なことなのかなというふうに思ったのがきっかけで、ちょっとこういう活動にお手伝いさせて頂いています。

その中で、なぜフランス鴨なのかというと、労働に見合った賃金。もっというと最小の労力で最大の収入を得るためには、鴨というのは非常にそういう価値のある商品なのかというふうに考えたので、ちょっと取り組みのお手伝いさせていただいています。

この辺も社会福祉協議会が公的にやり出したのではなく、いくつかのタイミングがありまして、先程ありました建部の里という、わかりやすい言い方をしますと宅老所みたいなところが、平成18年に開所になりました。社会福祉協議会の宅老所なので、当然支所という形で地域の皆さんに自由に使っていただきたいということで、障がいを持っているお母さんの集まるグループ「てまり」というグループの方が集まってお茶を飲んでいるときに、建部の里を見ながら、子どもの将来が心配で、作業所みたいなものがほしいという話がありました。そのようなお話しがある中で、ぽぽネット企画、むかごのあとで次は何をしようかと考えている人たちがいまして、そのときに指導の先生から「鴨をやってみませんか」という話があった。たまたま色なことが重なり合って、こういう方向にちょっと動いてみようかなという話になりました。非常にタイミングとしてはよかったと思います。

21年度に、私たちがこのフランス鴨を飼育するときに、何を考えようかなというのが、まず１年を通して収入を得るための商品の１つにすることができるかを確認する。何が何でも鴨ではなくて、私たちのよりよい収入を得るための商品になるのかなということを確認したかったというところがありました。まず仕事の１つとして、障がいを持っている、私たちの場合は比較的10代のお子さんが多いですが、障がいを持っている方の仕事の１つとして位置づけられる物なのかということと、次にその労力に見合った収入が得られる商品なのか。なおかつ、障がいをお持ちの方だけでなく、山形村の地域の方の協力は得られるのかというところの３つのあたりを確認したかったというのがございました。

実際、フランス鴨の飼育には、山形村で様々な方に協力をしていただいています。まず、建部の里というところにある物置だったところを大家さんに協力頂いて、協力者の皆さんで片付けをしました。家具などが入っていましたので、家具を出したりしました。これも地域の方々と、職員は私

も含めて３～４人くらいで行いました。

実際内部の改修というのがあり、村にあるホーム店さんがこれも実費程度でボランティアでやっていただきました。

仕事の合間で具材を持ってきていただいて仕切っていただき、建部の里から出た昔使っていたお風呂を水飲み場に改良していただきまして、鴨を50羽入れるような小屋にしていただきました。

餌やりとか掃除は、子どもさんとか、その協力者の方、親子でやってもらうということでやりました。餌やりは、朝１回夕方１回の１日２回。そのときに水を換えればいいので、私たちは９時と４時に、２名～４名の方々にやっていただきました。結構寄ってくるのですね、鴨が。わさーっと。中には、鳥が嫌いな子がいますので、なかなかその辺が難しかったりもしました。

小屋の中で樋を出し、この樋の両側に鴨が来られるようにして水を流して、これが水飲み場ということになっています。なおかつ、小屋周囲の環境整備も地域の方にやってもらいました。

ぽぽネット企画の代表は会社の社長さんなのですが、草刈りをして頂きました。

鴨のもみ殻を捨てる場所がなくてどうしようかと言ったら、この社長さんが話をしてくれて、これもボランティア的にやってきていただき、機械で穴を掘っていただきました。穴掘りも地域の方にお願いしてできたことで、ほとんど社協のお金を使わずにここまでやってきております。

さらに村の中で、鴨というものがどういうものかということで、試食会も１回行っています。これは鴨を飼う前に、自分たちを育てる物を食べないとわからないねという話で、みんなで食べに行きました。実際には一品を、村の中にあるレストランの方にご協力をいただいて、私たちが作った鴨を、実際に調理していただいて試食品として出していただきました。村の中で40人くらいお集まりいただいて、鴨はこういう趣旨でやっていて、こんな風になるのですよということを、食べていただいて、山形で飼って鴨を知っていただくという活動もしていました。

１年目の成果といたしましては、全部で50羽。年２回行いまして、夏に49羽、１羽死んで49羽。２回目に50羽できました。この期間に、15組のご家族にご協力を頂くことができました。当初の目的に合った活動ができたのかなというところで、いくつか考えてみましたが、仕事の１つとして位置づけられるものかどうかということについては、餌やりはできるけれども掃除は臭いがだめでした。餌をあげたいが鴨が怖く近づけない、そういう反応もありましたので、役割分担することで、障がいを持った子どもでも飼育はできるのかなと思いました。ただ、その時々で、常に全体を見る指導的な存在はどうしても必要になってくるのかなということも、この２回で出てきました。

もう１つ、労力に見合う収入が得られるものなのかということについては、現段階では、まだ正直赤字のほうが多いかなと思っています。鴨の小屋の片付け、改修に使った材料費等も何万円かかかっていますので、こういった物も含めますと今現在ではまだ、鴨の収入だけではちょっと賃金までは出ないという状態ではございますが、なんとか他の商品と組み合わせれば、やっていかれるくらいの労力で行けるかなというところまで分かってきました。ですから、組み合わせる商品の開発をしていかなければいけないと思っています。

地域の方の協力が得られるとかいうことについては、これはすごく大きかったと思うのですが、一応障がい者の方を真ん中に置いたときに、どういうつながりができたかなというところで、本当に１年前までお付き合いがなかった方などと、10人、20人くらいとお付き合いするようになったので、非常に地域の中でのつながりというのができたかと思っています。今後のこの活動を広げつつ維持することが非常に大切かなと思っています。

就労支援という部分で感じている部分が、やはり働くということは生活なので、生活の支援の１つとして、就労支援というものを考えないといけなかったなと思っています。それ

と福祉というのは、なかなかお金を表に出しづらいと思っていますが、やはり生活する上でお金がなければ生活できないので、やはりお金という視点をすごくメインに据えなければいけない場面が出てくるかと思います。お金がなければ生活ができないので、お金を抜きにして福祉というものはやはり語れないのかなと思っています。それと同様で、制度そのものとそれぞれの地域独自のやり方、こういった両方を活用していくことが必要かなと感じています。

すみません、最後の部分で、実際地域の方に「どうして社協が鴨なんか育てているんだ」ということを聞かれます。これに対してどうやって答えるかというのが、私たち社会福祉協議会の組織としての１つの課題なのかなと思っています。やはり「鴨をなんで社協でやっているのか」と聞かれたときに、職員の誰が住民の方のどなたに聞かれても、常に同じ説明、ある一定以上でのレベルでの説明ができる。これがないと、社会福祉協議会は地域福祉を推進するよと言っているのに、なんで鴨を育てているのかということ1つ説明できないのに、地域福祉の作業を推進していますというのは、すごく良くないのかなと思いまして、誰でも同じレベルで説明できるやり方を今考えているところでございます。

それが私たち自身の中で考えているポケットプランというのを作成する取り組みを今、2年くらい前から始めています。介護保険で出てくるケアプランというものがありますけれども、ケアプランの地域版という形を取りまして、地域のケアプランという形で具体的に鴨というもの、障がいをお持ちのお母さんたちから子どもの将来が心配だよ、でも村の中にあまり働く場所がないという思いを、どんどんこっち向きに動いていく中で、形にしていきます。こういう事をする中で、鴨がでてきたということを、文章の中で説明できるということは、やはり専門職としては必要ではないかと感じまして、今現在、これを作っているところでございます。

「ポケットプラン」を作成する意味合いとしましては、私たちが実践活動として行っている事を計画、紙の方に持って行く。その紙を持って行くものをどんどん積み上げることによって、最終的には地域福祉活動計画というものとして、まとめる方向で今現在頑張っております。

今、山形村には６区大きな区がありまして、各区６区ごとのポケットプラン、それから村全体のポケットプランということで、合計7個ぐらい作っていまして、これも５年くらいかければ、だいぶ量が増えてきますので、そうすると地域の皆さん方の思いというものも計画にまとめるという意味で、実践を計画に揚げていくことができるかなということで、今現在取り組んでいるところでございます。

ちょっと中途半端な発表になるかもしれませんが、私のほうからは以上です。

尻無浜／田中さん、ありがとうございました。

今の田中さんの話題提供、皆さんからの質問があれば、出して頂ければと思います。いかがでしょうか。

障がい者就労という視点もあり、社会福祉協議会という視点。先程社会福祉協議会は、生きている社協とか、死んでいる社協と、いろいろ言われていますけれども、そういう中での社協としての活動があり、あと地域のレッドマークという視点でも発表を聞けたかなと思いますし、その中で社会福祉士として田中さんが、どういうスタンスで活動していたのかというようなところも、発表の中から感じることができたのではないかと思いますが、皆さんの方からは、いかがでしょうか。

質問／すばらしい発想だと思いますが、１つわからないことがありますので、教えて下さい。鴨の雛ですね、これを手に入れるまでのルートです。

皆さんが鴨を買って、飼育して販売するまでの経過は、ご説明頂きましたが、その前の、鴨の雛をふ化して入るまでのルートと、それから今おっしゃっておりました販売が一番問題だと思います。この販売についての細部についても、今どのようにお考えか教えて下さい。以上でございます。

田中／一番大事な部分なのですが、その辺につきましては「信州フランス鴨の会」というところの協力、私たちが信州フランス鴨の会に協力するという形でやっています。今日、指定討論者の中にいらっしゃる笹井さんのほうでやっていただいているものでして、基本的なところは入ること、雛を仕入れる所と、鳥を出荷する所、この２点は笹井さんのほうでやっていただいていますので、最終的には、そんなお話しをして頂けるかなと思っています。

尻無浜／では、一通り話題提供が終わったあとのディスカッションのところで、指定討論になっています笹井さんの所とか、少し後半のところで今のところを触れたいと思います。

重要なポイントだと思いますので、笹井さん、あとでちょっと前に出ていただいて、お願いします。

他にいかがでしょう。

結構さらっと発表がありましたが、お金と福祉がなじまないようなところに挑戦しているという、非常に私も表現としてはいかがかと思いながらどこかで障がいを持った人たちががんばって作ったんです。どうぞ買って下さいというところが多い。当然必要ですが、どこかそんなことを踏まえた上で、もうちょっときちんとした商品を開発して、生活というところを意識しながら、取り組んでいく必要があるのではないかという発言を提言されたと思います。

それはかなり従来の取り組みからすると、ずいぶん大きな発想の転換が必要かと思う。そのためにはクオリティーを上げていかないといけないということだと思います。

先程質問がありましたが、やはりこの手のものは、売れなければ何もならないと思います。そこがどうなのか。山形村の村内でというようなことを、盛んにおっしゃっていました。村内で、ちょっと手伝ってもらった。村内で、売れるようにしくみが作っていけたらというようなところ、やはり社協と言いましょうか、地域と言いましょうか、その辺の活用する大きなポイントになってくるのではないかとちょっと思ったりもしました。

１つ私から質問ですが、年齢層の無駄遣いというような発言があったと思うが、その辺の所はどういう事なのか、補っていただければと思います。

田中／例えば年金の生活をしている方で、５万、６万で月生活している方がいらっしゃると思います。年金は、障害年金だと２ヶ月で13万だったり16万だったりすると思いますが、そうすると２で割るとだいたい月５万円から８万円くらいの計算になるかと思います。もともと高齢のほうから入ったので、お年寄りだと５万とか８万だとぜんぜん生活できる金額だと思います、１ヶ月で。ただ、20代30代で、障がい年金をもらっている方で、５万円とか８万円だと、本当に生活費だけで終わってしまうと思います。僕は生活費だけで良いよ。あとはもらった中で生活をしていくよということであれば、それはそれで１つの選択だけれど、やはり自分が20代の時のことを考えてもそうなのですが、遊びたいと思うのです。遊ぶには、お金が必要な部分が当然ありますので、自分で遊びたいお金は自分が稼ぐ。其れをすることによって、障がいのある無しに関わらず、やはり20代相応のおおっぴらに遊ぶことができるのではないかなと。そうでないと、20代で、80歳でなくなるとしたら、60年間、ずっと節約だけで生きていくのかというのは、やはり自分の中では、違うのかなという気がするので、是非お金を、おこずかいを稼いで生活していただきたいなというのが、自分の思いとしてはあります。

尻無浜／ありがとうございます。

最後に１つ、資料の中に１枚ページをめくったところに紹介してありますが、連帯経済というのを紹介してあります。最近クローズアップされて、12月に東京でちょっとこのことを考えるプログラムがあったりしたのですが、その連帯経済というのはどういうことなのかということを簡単に言いますと、社会との接点を再構築するということが大きな目標です。

社会との接点を再構築するという大きな目的がありまして、その際に必要な要素を３つ指摘してあります。それがそこに書いてあります、当事者性を重視すること。協同性の追求。コミュニティを地盤とした活動。そういう概念の整理がしてありまして、今非常に大きいところかもしれませんが、日本の経済先行き不透明というところで、いろんな経済という側面の中から、いろんなことが探られているのですが、１つの連帯経済という概念の中では、こんなことがきちんと位置づけられているのです。改めてですが、今発表して下さった田中さんの取り組みと、この辺の概念等々は、どこか相通じるものがあるのではないかとちょっと思ったりします。ご参考までに。

それでは、話題提供者３人目は六井洋子さんです。今日は地域と福祉というテーマでお願いしています。ちょっと外の雪を見ながら、六井さんのお話しを聞かせて頂けたらと思います。よろしくお願いします。

六井さんは、福祉ひろばのコーディネーター。福祉ひろば事業というのは、松本市が独自事業として取り組んできたものです。地区34地区。あるところは１つの地区内に２ヵ所拠点があったりする地区もあります。そういう事業があります。その事業のコーディネーターとして関わってこられたところから、その後、松本大学で学ばれて、卒業後ウィメンズサポートという団体を設立されました。いろんな地域との関わりの中から感じていること等々の話題が今日、提供されるのではないかと思います。

松本市福祉ひろば地域福祉専門委員会の委員でもあります。では六井さん、よろしくお願いします。

話題提供③ 六井洋子氏

六井／こんにちは。六井と申します。

今はウィメンズサポートの代表ということで、普通のおばあちゃんですが、今から何年か前は松本地区にある福祉ひろばでコーディネーターをしていました。福祉ひろばというと、松本的にはずいぶん皆さんに認知されているので、ご存知だと思います。福祉ひろばというのは平成７年に、今の市長の前の有賀正さんという方が設立した、来るべき、今はもう来ていますが、この平成７年の時に、来るべき高齢時代に備えて、お互いに地域で助け合う、支えあう関係を創ろう。そのために、まずお年寄りの集まれる場所をということで出発しました。私は平成11年から、田川地区福祉ひろばのコーディネーターとして６年ほど関わらせていただきました。そのときに、私が関わった平成11年頃は、当時、厚生白書というところに、福祉ひろばの活動が取り上げられまして、松本市民も地域という自分たちの生活している場所が、大変大切な場所であるということを、自覚し始めた頃、ちょうど関わらせて頂きました。

しかし、そこで私の福祉ひろばを通して見た地域というものは、町会、新村地区というのもありますが、田川地区は12町会という小さな単位が集まって、１つの地区を形成しているのですが、町会の長であります、町会長さんをトップとした、三角形をした地域だということがわかりました。町会長さんが三角形の一番上にいて、真ん中に町会役員さんがいて、一番幅の広い底辺には住民の方がいる。情報も上から下りてくるという、情報の伝え方。だからなかなか一番底辺にいる住民の声は、届きにくいと感じました。まず、私が感じたことは、そういうことでした。

私たち、福祉ひろばは、その一番底辺にいる住民の人たちが来るところですので、その方たちを通して見た地域の人というのは、自分に自信がない。命令待ち。「何かをすることを言ってくれ」

とか、「私はこんなに事が出来ない」とか、「なんでも言う事をするから、命令してくれ」という、そういう人が多くて、これは今まで何かをしようと思っていても、地域でたたかれてきた。何かしようと思うと、地域でたたかれてきた現われであって、人の言う通りにやっていれば安心という自己防衛、そういう本能かと思いました。

でもその一方で、私が何かをすると、「こっちのやり方のほうがいいのに」「私はこういうことなら、すごく得意だよ」と。ならば教えてよというと、「そんなことはできない」でも、ちょっとだけ教えてくれない？　私に教えてくれない？　そこから始めまして、こういうことが山ほどあるというのがわかってきました。

「上手だね」とか、何もできないという方には、先に来て机を並べたり、お茶を出してくれない？「そういうことなら毎日やっていることだから出来ますよね」というと、「できるよ」と。今日は、きれいに机を並べたね。お茶の入れ方が上手ねと。ただそれだけのことでも、自分が認められたということに気づき、すごく喜んで、皆さんが関わってくれるようになった。これは、私（福祉ひろば）という、公の場でその方を認めてやったということが、大きな喜びとなり、毎日足を運んでくれるということだなということに、気づきました。

言いかえますと、住民を主役にするということだということもわかってきました。そういう繰り返しをしていますと、当然、私はここが得意、私はここが得意、という役割分断が出てきます。そういう役割分担が、うまく回り始めると、その福祉ひろばの活動も盛んになっていきます。それが、自分の生活の場に戻って、町会というものを作り上げていく。地域を作っていくということにも結び付くのですが、そういう１つ１つ、編み物サークルをするので、何曜日の10時から２時間するので、サークルを立ち上げようという１つの例があります。遅れてきた人は、10時からなのに10時半に来たってだめだよとか、お茶を飲むころに来てもだめだよとお互いに言い合うようになります。そうすると次からは時間を守ろうとか、人のやっていることに口を出さないとか。私はこれをやりたい。でもそれよりもこれがいいよとか。そういうふうに最初はなっていますが、でもだんだん時間を守るということができるようになると、人のやっていることに口を出さないとか。では今度はいつくるねという、責任も出てくる。いつまでにやっておくよということ、これが社会性が出来てくるということにも気づきました。

そういう方たちが、大勢ひろばに来て、大勢関わるようになると、自分の家の周りにいてもうまくいく。その積み重ねが地域を作っていくということにつながるのではないかと気づいていきました。

ひろばに来ると、「私を待っている人がいる」とか、「いつまでにやらないといけないので、私はどうしても行かないといけない」というところから、自分の居場所が出来てくるわけです。そうするとだんだん「あなたも行ってみない？」というふうに人を誘えるようになる。お友達が増えるようになる。

しかし１つの例として、信大に昔医療短大というのがありまして、そこで大勢の専門職の人たちが学んでいるところがあって、その学生が来たいといって、それでは高齢の人たちに体操を教えたり、リハビリの仕方も教えてちょうだい。今あなたたちは学生さんだから、ちょうど実習になっていいよね。それで地域の人たちにも、学生さんだから優しく教わってやってと、うまくいくようになったのです。でもたまに専門職、例えば保健師とか、ちゃんとしたリハビリの方が来て、「学生になんかやらせるな」というふうにすごくしかられたことがあります。

でも、お互いが認識しあって、学生だからやってもらいたい。下手でも、血圧の仕方、そんなの本気で誰も考えていないけど、「血圧計を練習させて下さい」「200」なんて「うそっ」といって、すごくほほえましかったのですが、あるとき保健師さんが来て「やってはいけない」と。このとき

は私自身、せつなくて、せつなくて、そういう専門職になんとか勝ちたいと思って、松本大学に入りました。

大学へ入学しまして、別に資格を取ろうというふうに思ったわけではないのですが、大学で地域福祉ということを学ぶ中から、何か私に足りないところがあったのではないか。他に気づくところがあったのではないかということで、入りました。大学で学んだことは、外から見た外からの地域づくりということを学びました。よく白戸先生に教わったのですが、外からの人は、風の人になればいいということで、風の人としてこの新村に来た、私が、その地域を好きになる。好きになるということは、その地域を認めるということだと。それでそこに暮らす私だけでなく、この地域を好きになる人をたくさん増やすこと、その人たちが困ったときにいつか味方になってくれるのではないか、そういうことを学びました。

そこで私は風の人を増やしたくて、松本近辺に住む地域に根ざした女性リーダーをたくさんたくさん作りたくて、「ウィメンズサポート」というのを作りました。そこに住んでいなくても、ある地域が好きになって、こうしたらどう、ああしたらどう、と提案できる、そういう人たちが本当の地域に関わる人材だと思っています。そういう外から来た人に、「ここ良いところだね」「ここは足りないんじゃない」ということは、皆さんあまりいやに思わないです。いいところだねという、そういうことがその地域の方たちの自信になって、だんだん地域力が育っていくのではないかと思えるようになりました。

昨日、ここに来るに当たって、福祉ひろばでやっていたことを整理していましたら、平成11年から、何年かやってやっと地域の人に慣れてきた頃に、パワーポイントで作った資料が出てきました。当時生き甲斐づくり事業というのをやりましょうと、地域の役員さんにお願いする資料です。１つひろば利用者の方たちを主役にしようと。子どもたちに昔話をしてもらったり、おやつの指導をしたり、戦争体験を作る、そういう利用者にしようとか。ひろばに来ない人たち「私は元気だから、ひろばに行かない」という人たちからは、マレットゴルフを教わろうとか、食生活、お料理を教わろうとか。洋裁をしたり、袋を作ったり、雑巾を作ったりしたのですが、そういうことを提供してなるべくひろばに来て、先生になってもらおうとか。私は、まだお役に立てることがあるんだという、老いの先送りに役立ってもらおうという、そういう事業をしようというのが出てきまして、私もまんざらただ過ごしたわけではないと思いました。

今、歩くということがすごく盛んなのですが、歩いていけるところには、地域課題がたくさん転がっていて、歩いていると地域の課題が見つかるということもひろばでやって、それが地域福祉計画につながればいいなというふうに思ってやってきたんだなということもわかりました。

次、人材育成ということをお話ししたいのですが、先ず自分が育つことが一番大切ではないかと思います。私はいつも何かをするときに、「自給自足」という言葉が好きで、自給自足で物を考えるということをしています。例えばこの地域には、野菜とか、お米とか、それから他のことは全部買わなければいけないけれど、でも人材だけは自足できるよと。でも違うところに行けば味噌とか野菜とか、他のものは全部自分のところで自足できるかもしれないけれど、でも人材だけは足りないとか。そういうふうに考えれば、わりかし頭に具体的に浮かんだり、皆さんとお話し合いもスムーズに行けて、難しく考えなくても、その人材育成に結びつく事業ができるのではないかなと考えています。

当たり前のことですが、先程歯医者さんが、口の中を見れば、そのうちのことがわかるということもおっしゃっていましたが、このおじいちゃんおばあちゃん、高齢の方の所を専門職さんが見れば、その生きてきた全部過程までわかるとか。家庭生活までわかるというような、その人には、どんな価値観があるかということ。それから、歩けるようにするにはどういうプログラムが必要か。心を閉ざしている人には、どんなプログラムが必要か。それから大きく言うとそういう人たちが多く集まる地域は、活性化させるためには何が必要か。そういうことがわかる人材。それを抱えてい

るのが、その公民館であり、それから施設、いろんな施設だと思うのです。

地域で何かしてくれませんかと言っても、とても忙しくてできないと言うのです。そうではなくて、その地域、その施設を発展させるためには、中にいる人材が外に出て協力を求めないと、その施設というのは発展していかないし、味方にもなってもくれないと思います。そういうふうにすると、とても忙しいというのは、私は言えないような気がするのです。そういう専門職の方が大勢いる施設であり、公共の公民館であり、ひろばの職員であって欲しいなというふうに思います。

障害者の施設なども、専門施設なども、ひろばに来て、いろんな障がいのある方のことを理解してくれというふうに言ったのですが、来て理解してくれではだめで、一緒に何かをしませんかというふうに活動が伴わないと、絶対に地域の方というのは、理解しないわけです。ひろばにいるときに、四賀アイアイと交流をよくしていたのですが、アイアイさんと合流する前に、ある専門職の方が来て、アイアイさんにいる方たちは、みんな大人なのですから、「僕」とか、「子どもたち」とか、言わないで下さいと。六井なら、「六井さん」と名前を呼んで下さいと。絶対「子ども」なんて言わないで下さいというのです。でも、おじいちゃんやおばあちゃんたちは困ってしまって、いざ交流が始まってみたら、名前なんか初めてですから知らないので、遠巻きにしているわけです。でも私が考えてみたら、ひろばに集まる人はみんな70代から80代の元気な方たちですよね。アイアイさんの方たちも、いくら20代、30代といっても、子どもであり孫の年代なのです。だから子ども、良く来たなとか、それで十分だということに気がついたのです。

それで「いいよ、いいよ」そばに行って、話しかけてあげてと。おじいちゃん、おばあちゃん、作ったお菓子を食べて、というとにこにこして近づいて交流することができました。

そういうふうに地域とか、住んでいる方たちに合った理解をして頂く方法というのは、考えればいくらでも転がっているかと思います。だから、「来て障がいのある人たちを理解して下さい」ではなくて、一緒に何かしませんか。そういうことが、私は、専門といわれる人たちの役割だと思います。

田川福祉ひろばにいるときも、田川デイというのが、そばにありましたから、そこはそこだけでやって、絶対地域の人たちと忙しいといって、何もしなかったのです。あるとき、地区で防災訓練のことをするという話が持ち上がったときに、ひろばの庭でやって下さいと。この日はひろばの方たちもデイの方たちも、一緒に避難させる訓練をして下さいと。デイの人たちは拒否しました。でも私が、「ここが火事になったら、誰に助けてもらうの。どういう方たちが来ていて、どういう職員さんがいるのかということを、町会の人や地区の人に知ってもらわないと、いざというときに誰も来てくれないよ」と説得して、避難訓練を一緒にやったことがあります。それから地域の人たちが簡単に田川のデイにボランティアにいくようになりましたし、ひろばのほうへも体の調子の良い方は遊びにいらっしゃいというと、交流が始まったのです。

ひろばで、文化祭をしたときに、こういう事もありました。お母さんたちが、ひろばとかデイの水なんか汚くていやだと言っていました。でも交流が始まったら、子どもたちも来て、遊べるようになりました。そういう専門職という人たちが先に立っていろんなことをするということを学ばせていただいたものですから、今、つたない話ですが、発表させて頂きました。
どうもありがとうございました。

尻無浜／地域の活動を長くされて、いろんな視点からの話が伺えたと思います。皆さんから質問はありますか。
村岡さん、ちょっとコメント、質問を頂けたらと思いますが。

村岡／お伺いしている中で、ご自身がどのように勉強していったらよいのかということにも触れていただいたと思います。お話し

の中で、施設とか専門職が地域に関わっていくうえでの役割とか視点についてお話し頂いたと思います。改めて大学というのも、そういう意味で、六井さんのような方がお見えになったとき、どういう役割があり、どういうことをお伝えしていけばよいかということがあると思います。

六井さんが松本大学で学ぼうとされたとき、何を期待されて、どういう事を持って帰りたいかと思われたかということを、少し教えていただければありがたいと思います。

六井／松本大学に入学したのは、先ほども少し触れましたが、ひろばでいろいろやっていたときに、看護師さんとか、保健師さんとか、そういう専門の方が「あなたは素人だから口を出すな」とか、「やってはいけない」と言われたのです。私は注射するわけではないし、専門のところに踏み込んだつもりはないのです。地域の方たちの要求をまとめて、保健師さんに伝えたり、行政に伝えるという役目をしていたのです。ただ、頼まれてきて「こういうふうにしろ」というのではなく、ここをこういう風に言い直したら、伝わるんじゃないかということを言っていたつもりだったのですがが、「専門外だからやるな」ということで、それが悔しくて松本大学に入ったわけです。

松本大学で、白戸先生から学ぶ中で、私は普通のおばちゃんで良いんだ。出しゃばりのおばちゃんで良いんだ。普通の何も肩書きがない人ほど、口でいろいろ言えたり、強いことが言えるんだということがよくわかって、それが学びとなりました。

尻無浜／今、六井さんが、長く関わられた地域、とくに福祉ひろばというのは、松本市で当然事業が続いていますが、当初は地域の縁側機能として、六井さんのような気持ちをもたれたコーディネーターが迎えていて、すごく地域に効果があったということは、住民アンケート等でもわかった経緯があります。ここ15年経って、少し機能を変えていく必要があるのではないかという議論等がなされているのも事実です。その際、専門性を高くしたい形で、ひろばの事業を展開した方が良いのか、あくまでも住民の自主性というような拠点としてそういった効果を残しながらいった方が良いのか、非常に難しいところです。福祉ひろばというのは松本の独自の事業なのです。こういう介護保険法だとか、全国の社会福祉の法律に載ってこない事業なのです。それをここだけに存在する事業をここに住んでいる私たち住民がどう育てるのかというのは、行政だけの問題ではなく、私たち住民の問題なのかなと思うのです。しかし、一方では舵取りが難しいということが言えるのかなと思います。

それでは、10分ほど休憩します。

ディスカッション

尻無浜／皆さん時間厳守にご協力頂き、ありがとうございます。再開したいと思います。

これからはディスカッションということで、先ほどお3方のお話しを受けて、まずこちらで指定討論者を準備させていただきます。お２人から、まずコメントを頂けたらと思っております。

最初に笹井俊一さんです。笹井さんは、企業組合カスタムラボという団体の代表をしていらして、松本市のものづくりのコーディネーター役、まとめ役をなさっております。今でも現役でいらっしゃいますが、さらに現役の時には酒造会社を営まれていて、いろんな工夫をしながら、事業をされていたという経歴でございますけれども、笹井さん、どうぞ最初にご発言をお願いしたいのですが、これまでの話題を聞いていて、また笹井さんが取り組まれているものづくりといいますか、フランス鴨等々もご一緒に活動しているわけですが、そこの所等々、先程、質問もありましたので、少し、含めてコメントを頂けたらと思います。よろしくお願いします。

笹井／笹井と申します。よろしくお願いします。

私は自分のものを考える前提として、そんなに深く理論的に物を考えるものではありませんが。いずれにしても高齢になって少子化になるから人口が減るというのは、これは日本も、松本も全く同じで、一昨年で行けばおそらく日本で114万人くらいが亡くなっているわけで、その内ほぼ60%ががん、あるいは心筋梗塞、脳梗塞、その3大疾病で、6割の方が亡くなっているわけですから、そういう意味での社会的損失がこれからますます増えるし、たぶん団塊の世代の方が、2030年くらいになるとだいたい平均余命の年齢に達するわけです。あと20年です。そうするとやはり、高齢でもありながら亡くなる方がもっともっと増えていって、日本全体の人口が減っているので、それを松本市に置き換えると、松本市というところが果たして人口が減ることによって、その減った分をどうやって稼ぎ出して、松本市民を食べさせていくか。どうも私は外から見ていて、見えない。日本全体を見ていて、松本市がどういう市を作って、どうやって産業をもう一度興すのかという、そういう論点を、何かやはり理事あるいは議員さんから明確な物を出していただければ、我々もまた目標が定まって良いのではないかといふうに思っております。

出生率が例えば1.36とか1.29とか言っていますが、女性1人で子どもを産むわけではなくて、必ず2人で産まなければならないわけですから、次の世代になれば、たとえば1.29が次の代と同じ出生率でいくとしたらその2乗ということになるので、もっと減っていくということで、加速度的に人口が減って、たぶん松本も昭和40年代くらいの社会規模になるのも、そんなに先のことではないということでいけば、私は福祉というものもビジネスとして捉えて行かなければやりようがないというのが、今の前提で考えた自分の、大した考えを持っているわけではありませんが、ビジネス福祉としてもやはり稼ぎ出すということをしないと、与えられるのを待っているというのは、どうも不安でなりません。稼ぐ方があってくれればいいのですが、その辺も一緒に福祉もやっていこう、ビジネスとしていこうと、そんなことになろうかと思い、これは松本大学とのご縁ができて、いろいろ大学の先生のお話を聞いて、自分でも勉強をして、そんな思いに至ったということがありますので、それが私のものの考え方の前提であります。

フランス鴨のことは、この資料がありますので、お読み頂ければこの中の内容でご理解頂けるかと思いますので、ここにない部分、先ほどご質問がありました、雛をどうやって入手しているのか、それからそれをどうやって販売しているのかというようなお話しがありましたので、先にその辺だけ、お答えと言いますか、今までの経過を説明します。

今までで330羽くらいの飼育しかしておりませんので、フランスから雛という形で輸入することはとてもそんな力はあるわけではありませんので、JETROに通って研究はしましたけれども、これはまだまだ先の話だと思っておりまして、今は、青森県から雛を入手しております。

青森では、だいたい1日に1000羽くらいのフランス鴨を処理しているという大規模工場がありまして、先年3月に皆さんと青森に行ってきました。そこから必要な時期に必要な数を分けて頂くということをやっておりまして、金額では1羽600円。それが羽田空港に青森から飛んできますので、我々は羽田空港に取りに行きまして、それを持って帰って、すぐその足で南安曇農業高校の育苗器の中に1週間ほど、預かっていただいています。餌付けをしてちゃんとした体力にしてから、だいたい1週間、10日まではお願いしていないと思います。学校でお願いをして、それから各飼育希望者の所に雛を分けるということであります。

販売については、今はまだ商品開発というものをするだけの余力、力もないということもありますし、数が数なので、中抜き個体というのでしょうか、中の内臓を抜いた一羽丸ごとで販売をして納めさせていただいて、主だったところは松本市内、安曇野市、塩尻市を含めた旅館・ホテル・レストランというところが一応販売の対象になっています。

今、納品価格は税金、消費税を抜いたもので、1kg2300円で先へ全部納めておりますので、需要

者としては、もう少し価格が安くなれば、お客さんにももうちょっと低い値段で提供できるという要望もありますが、今は自分たちでまだふ化もしておりませんので、600円で分けてもらって、羽田まで取りに行ったりすると費用がだいたい850円くらいになってしまうとか、それからまた後で時間があればちょっとまた自分で体験した問題点もあったりするのでお話ししたいと思います。食鳥の処理はたえず増加しておりまして、これは県の信州黄金シャモもたいへん頭を痛めているようです。その辺のことがございますので、そこでもまた結構費用がかかるということですので、まだまだ一人歩きをして、飼育者に十分な手当といいますか、収入をお届けするまでには、もうしばらくお時間をいただかなければいけないかなというようなところでございます。

とりあえずこんなところです。

尻無浜／ありがとうございます。

ある松本の老舗のおそば屋さんが、東京の大手のデパートとお歳暮の連携が取れている。そこにおそばを出しているだけでなくプラスアルファの何かが欲しい、そこで鴨がほしいので出してくれないかと言われました。そのためには月々定期な鴨が必要になります。そういう依頼がありましたが実はお断りしました。

売れるということは、一見矛盾するかも知れませんが、非常にこういう取り組みというのは大事であって、売れなければというのがありますが、もう１つの大事な側面がありまして、「地域性」なのです。東京等々に出して売れればいいのかということではなくて、売れていく側面と、東京に出すと、東京を見ていると、東京だけではないですが、地域外を見ていると、地域に何も残らないのです。それよりは地域で残るように、地域の方に喜んでもらえるようにというようなところで、まず地域で回っていくような仕組みを、今作る取り組みをしています。現在、松本市のイタリアン・フレンチの料理組合にお願いをして、そこでまず使ってもらおう。ちょっと駅前のワインを飲ませてくれるところでは、地元産のフランス鴨を使っていますよと、けなげに看板を出して下さっています。そんなところで回そうと思っています。

まず今まではフランスから直輸入して買っていたけれども、地元でフランス鴨の肉が手に入るのであれば、まずそこを使おうと。誰が作ったのかわからないだけれど、地元の人が作ってくれるなら、顔が見えるというようなところで、多少そこで気軽に入り、ちょっとフランスから輸入するよりは価格も安いというようなところで、消費してもらっています。

しかし、７月に出すのに300、12月に出すのに300。全部で600しか作っていないのです。レストランから言えば、毎日決まったように出したい。欲しい。でも、追いついていかないわけです。山形村で取り組んでいらっしゃるような所からすると、そういうものに追いついていかない。だから逆に、７月と12月はそういう形で、きちんと出荷できますので、それに合わせてお店の準備もして下さいということで、お願いをしているのです。

そこで、今のポイントは、やはり「ビジネス」という所ですね。事業性を追求しながら、社会問題に取り組んでいく。この場合の社会問題は、障がい者の工賃のアップです。これは先程から「障がい者」と言っていますが、対象は、高齢者にも通じるわけです。若者のニートにも通じるわけです。そういうものを踏まえての社会的就労というような取り組み等々が開発途上というか、取り組みの途上にあるのかなと思います。

次に、高田克彦さんを紹介したいと思います。松本市社会福祉協議会の係長でいらっしゃいます。災害の関係で社協という側面で地域に出ていらっしゃるという、活動の実績があります。ご自身でNPO を設立して、何か地域と関わるという計画もおありなようですので、そういう男粋みたいな所も合わせて、ご指摘をいただけたらと思います。

高田／松本市社会福祉協議会の高田と申します。よろしくお願いします。

先程、生きた社協もあり、死んだ社協もあるということで、松本社協はどちらと捉えていけばいいのかと、ずっと考えていたのですが、まだまだ生きた社協でいたいと思いますので、松本市社協もよろしくお願いいたします。

今、ご紹介頂きました災害の関係。私は結構災害に力を入れさせていただきまして、阪神淡路等々には関わってはいないのですが、その後の岡谷の水害とか、中越地震、先日ありました岡山の水害等に出かけていきまして、そこで地域づくり、地域がどうなるのか、災害を通して見たときの地域。突然起きた災害によってコミュニティが壊れてしまう。そのコミュニティをどのように今度回復していくのかというところで、災害の復旧、復興というところに携わらせていただいております。

そういうところで見てくると、ボランティアさん、白戸先生がお話しされていましたが、風の人。ボランティアというのは風の人になります。そのときに一番がんばっていただきたいのは土の人。それが地元の方です。その方たちの後方支援。ボランティアの方が行って、全てをやってしまうのではなくて、ボランティアの人たちに対する自立支援を行うというところで、地域づくりに関わらせて頂いております。

いろんな災害が起きたとき、地震も水害もそうですが、どれくらいの被害があって、そのときにその方たちがどれだけ対応できるのか。そういうところで足りないところの側面をお手伝いするのが、ボランティアとして私どもが活動しているところでございます。

そういうところを踏まえて、災害時に対応できるには平常時から、ということで常日頃の地域でのつながり、地域を好きな人を増やす。ということは、その地域を大事にしているから、そういう人たちが育ってくるのでしょうし、また逆にその人たちの視点から、歩いたところに課題が見つかるというところで、その課題を１つ１つクリアしていければ、その地域づくりに動きが取れていくのかな。そこで地域が作られるのかなと思います。

あとは、場所は違うにしても、村居先生のほうでお話しになりました国際協力というところで、地域の診断能力を磨くと言われました。あとは問題の解決能力を磨くというところで、その地域にどういう問題があるのか。その地域でどういう人たちが困っているのかを、皆さんで考えながら、地域作りというところを１つ１つつぶしていけば、良い進められる方向の地域作りということができるのではないかと思います。

今後私の活動としまして、本日の資料に設立趣旨書ということで１枚付けさせていただいていますが、NPO 法人というものを自分で設立しながら、ここの趣旨の中にも書いてありますけれど、住民１人１人の方が主役となっていただくような地域づくりをしていきたい。そのためにはボランティア、当事者、支援者、あとはそれを支援する団体の方と協力しながら、災害にも強いまちづくり。あとは災害時要援護者といわれます外国人の方。外国人の方も松本にはかなり多く住まわれておりますが、なかなか外に出るきっかけがない。ちょっと聞いた話に寄りますと、子どもを夕方遊びに行かせたいが、遊びに行かせられる館がないということで、そのようなところのサロン的なものをやってみるとか。あとはブラジルのお母さん方が、いろいろなサロンに行ってみたい、ネイルアートを習ってみたいのだけれど、そういうところに行かれない。そういうのを教えてくれる方もいないという話も聞きます。そういうことの支援が今後できるような団体が作れていければ良いのかなと思います。

簡単ですが、この辺で終わります。

尻無浜／高田さん、ありがとうございました。

笹井さんに取り組みのプロセスの中での課題は、どんな物があったのか言っていただきたいと思

います。

笹井／生き物ですので、どうしても生肉といいますか、そういう形で商品にしていかなければならない。それを加工品するにしても、羽根を取って、裸にして、内臓を取ってという食鳥処理というふうに法律では言っていますが、そういう物がないと他の生き物も含めて世の中に出回らせることができないわけです。食鳥処理に関しては、食鳥検査法という法律が平成になってからできました。松本の島内では屠畜場がありますが、あれはまた屠畜場法というまた別の法律があって、あそこでは家畜、牛、馬、豚、やぎ、羊、そういうものだけしか処理できない。ですから鳥というものは、あの中には持ち込めないということです。法律の中でも条項を詠んでみますと、ずいぶんおかしいと思うところもありますが、できた法律ですので、それに従っていかないといけないわけです。

食鳥、今我々のフランス鴨は飯山。厳密に行けば長野と飯山との境ですが、そこまで運んでおります。生きた鳥なものですから、300羽を例えば同時に持っていくなんて、とても向こうの処理場の都合があってできないので、だいたい多くても１日50羽から60羽くらい。そうすると松本を朝５時半から６時に出て、だいたい向こうに８時くらいに入って、それから必死になって５～６人でみんなで応援に行ってやって、ようやく夕方、肉になるということですので、単純にいけば50羽ですので、６回往復しなければいけません。

この費用が本当に馬鹿にならない。処理場の費用も含めて、馬鹿にならないのです。向こうへ50～60羽置いて帰って来るというのは、むこうには能力がありませんので、できないと言う。必然的にどうしても、この地域で食鳥処理場を作りたい。そうすると内容はともかくとして、一番の問題は地域との話し合いが、まず不成立に終わる。「そんなものは、もってきてもらっては困る」簡単には、そういうことです。「みんな処理するような所は他に持って行け」「島内にあれだけ大きなところがあるんだから、そこに持って行けばいい」と言われます。ごもっともな話ですが、まずそこでぶつかります。

これが一番問題としては、大きいと自分では思っています。今、最終的な候補を絞って交渉していますが、これとて簡単にいくかどうか、大勢の中ですので、必ず反対が出てくるので、そういう方の反対は、「これこれこれをしてくれればいいよ」ということではなく、「だめなものはだめ」とシャットアウトされるものですから、そこから中に入れないのです。

さりとて松本市が当然絡む場合、松本市の各課にお願いをして、「そこのところをなんとかしてよ」と言っても、行政は度胸がないという言い方をすると怒られてしまいますが、そういうところはさわらない。俺の所はこれだけのことをやっているので、そっちはあなたがたがやりなさいと。そういうことになるので、一緒になって、こういうものを育てていこうということには、やはりなりにくいですので、こちら側でやらざるを得ないのが現状です。

そこで問題点なのです。住民の問題は別です。例えば農政課。処理場の関係ですから、建物を建てるので、建築主導課。上下水道がありますので、排水の問題で上下水道課。排水しますので水質検査課。それから環境保全課。あとは何でしょう、障がい者福祉課、社会福祉部。障がい者指導課。障がい者の就労場所になりますので。

そうすると全部我々が１個１個回らないといけない。こういう事の時間の浪費というのは、結構大きいのです。時間がかかるし、相手がいなければ、１つ市役所に行って本庁の中、全部回れるかというとそうも行かない。１日に１カ所くらい。下水道課は島立に行かないといけない。宮渕に行かないといけない。そういう時間がずいぶんかかる。私はこういうことはたまたま食鳥で体験したことですが、松本市の中に１つのプロジェクトの希望に対して、そういう専門の人が出てきてくれていて、そこへ私どもが行って「実はこういう事をやりたい」

というと、みんな関係課が出てきて、「これはこうだと」やってもらうと、問題点も洗い流せるし、時間も短縮されるし、そういうノウハウを積み上げて、次の他のことを希望する方へ提供ができる。私はこれはやってしかるべき事ではないかと思います。

そうではないと、建築指導課で、ここは農地にかかっていないかどうか、宅地になっているか、いちいち法務局に行って調べなければならない。また法務局に行くと1500円也の手数料を払い、発行してもらって見たりする。時間と費用が意外とかかるという問題が、松本市の例で今回体験しました。

それから食鳥処理場を作るためには衛生管理室というものが必要なので、食鳥処理に3年以上関わった経験者でないと、その衛生管理者という資格が取れないわけです。もう1つは、管理者も受験資格、人的要件。これは酒なんか、アルコール犯罪なども必ず人的要件が出てくる。どこそこで経験が3年以上ということで、県の解釈が食い違っておりまして、私はおかしいと思っていますが、最終的に県の解釈が間違っていました。

そういう問題があり、こちらがどうしても勉強して、ある程度対抗できる物を持って折衝しないと、通常、県に「資格がありませんよ」と言われると、通常は引き下がると思います。一番私は、そういう解釈、大事なところは行政として、責任を持って変えていただきたいというようなお話しをしました。

食鳥処理に関しては、住民の問題。行政に対してはそういう対応をしてもらえないか。そういった法律上、人的資格があるないという解釈をもっている。この3つで苦労したというよりも、自分で勉強ができたと思っています。以上です。

尻無浜／ありがとうございました。

今のお話しは、地域、なかなか課題があって、やはり従来の文化とか、規則に基づいている部分が、必ずついて回っているということを、明らかにしていただけたのかなと思います。
もう1つ私が準備した、今の課題というか、壁というところで、皆さんに見ていただきたいのを、ちょっと触れたいと思います。

資料の最後のページに、新聞の記事を載せています。「笑顔のままで」21番目です。信毎で出ている今認知症の問題を取り上げている特集ですけれども、信毎を非難するつもりはありませんが、問われている文章を指摘したいと思います。それは線を引いてあるところです。

「せん妄」が始まり、時々手をたたいたり、大きな声を出すようになった。そのすぐ後、宅老所にデイサービスを断られた。「うるさくてほかの人に迷惑をと言われ、ほかのデイサービスへ移った。

これだけではわかりませんが、僕はここのデイを知っていまして、全部、探りました。実は、ここでどこの宅老所なのかもだいたいわかってきますし、先にあります美代子さん、66歳。母のトクさん、実名です。わかるわけです。実はせん妄が始まって、すぐ後断られたという表記で理解できるかと思うのですが、実は間違いで、先ほどまで信毎の記者さんがいましたので、ここまでいて欲しかったのですが、帰られたようです。

信毎を僕は非難するつもりはないのですが、我々地域住民として、どういうふうに対処しなければならないのかというところに留めておきたいと思います。断られたというが、実際には結果的には断ったのですが、断る前に実は現場では、1年の取り組みをしているのです。1年かけて、この人がどうなのか、ああなのかとか。さらにこの人は、有るところでは1年、そのあと違うデイサービスに行っても、ああだこうだという現場では取り組みをしていました。その辺の所まで、この記者は取材をして、こういう表記で良いのか。

新聞を非難することだけで終われば、何にもなくて次に発展しないので、そこを言いたいのではなく、社会不安をあおるような記事がどうしても載ってくる。ここで1つ言いたいのは、不安にな

る必要はなくて、実はここで１年もかけて、地道に取り組んだ結果、１年取り組んだ現場の動きもあるんだよということを、実はお伝えしたい。そこには、当然ルールに従った事業所展開をしていて、そこには専門の教育を受けたりとか、いろんなボランティア、自主的に関わった人たちがここに関わられているのです。ですからここは僕のほうから、誤解を解いていただきたいためにこの発言しているわけなのです。この記事だけを見て、皆さん、どうぞ、不安がらないで下さい。そうでない側面で地道に取り組んでいる例もあるというふうに思っていただけたらなあと思います。

この辺のところと先程指定討論者であられます笹井さんがおっしゃられた、良かれと思っていても、なかなか追いついていかない現状がある。松本市の例も取り上げてはいけませんが、農業ルネサンス事業を活用して、食肉処理場を作ったらどうですかと入り口の所では、甘い声かけをして、そのあとにああだこうだと、二重に三重にも四重にも必要な書類、等々に関しては何も協力しない行政の在り方を指摘するのではなくて、そういうものを踏まえて、我々は今後の実践で知恵を出し合いながらやっていく必要性があるのではないかなというところを、ここではシェアしたいのです。

もう皆さんにご案内した時間12時半近くになってきました。10分、15分くらい延長することをご了承下さい。その間予定で途中退出される方は、どうぞ、退室していただけたらと思います。最後に、時間はありませんが、それぞれ今日、話題提供して下さった方、指定討論者として登場していただいた方、ちょっと盛りだくさんだったかなと思いますが、最後に２～３分くらいでコメントをいただけたらと思います。そのコメントの際に、ちょっとものさしというか、含んでいただきたいのが、先程の資料の１枚めくっていただいたところの上の所です。「社会開発の福祉の概念定義」開発型福祉というものを紹介してあります。

そこには、３つの視点が示されています。①社会問題が処理される程度です。問題が処理されているという程度です。いろんな課題があると思いますが、どの程度その課題が解決されているのかという程度。②ニーズが充足されている範囲。それぞれニーズを持っていると思うのです。施設に入れば、施設に入所しているなりの充実。どの程度の範囲の中で充足が図られているか。③チャンスが与えられている程度。やろうといったとき、そのチャンスが準備されているのか、準備できそうというような社会があるのかというような、そういうとらえ方で、福祉をとらえられないか。基準とか物差しをここで示してくれているわけです。

これを踏まえて、また、今日の所を顧みて、それぞれの今日の話題提供の３人、指定討論者の２人、最後３分程度でコメントをいただき、最後にコメンテーターの村岡先生にまとめていただき、終わりにしたいと思います。15分くらいの延長をご容赦下さい。

最初に村居さん。よろしくお願いします。

村居／大変難しいですが、私は地域医療をやっていて、ちょっとそこから日本は結構恵まれているなと。「結構」というよりも、本当に恵まれている。地球上には60億の人が住んでいるわけですね。日本のように24時間電気が使えて、安心な水が飲めてという国は皆無に近いです。そういう視点も非常に大事かなと思います。

私のように医者でものを言っていたら、やはりそれだけではだめだなと、気づく人も結構いて、そういう変人も。皆さんご存じのように、ペシャワール会の中村哲さんという人は、今アフガニスタンで、運河を造っています。

結局のところは、現実に格差の問題があります。格差は経済的な格差もありますし、宗教的な格差、あるいは民族間格差です。ここ数年私が関わっているボルネオのサラワク州は、州の人口の60%がイバン族という森の人たちなのですが、森林をどんどん削ったために、彼らが自給自足できなくなって、町に出てくるわけです。町に出てきて、彼らがちゃんとまともに働け

るかというと、教育の機会も就労機会も非常に制限されているために、それは結局健康に関わって早死にして、病気になっても治療してもらえないという現実があるわけです。

私が今取り組んでいるのは、健康が壊れていく、その原因となる格差について我々外国人としてどの程度関われるかという問題です。

ミャンマーも多民族国家。マレーシアも多民族国家です。日本では、そういう発想ができにくい。単一民族の国。まあアイヌとかいますけれども、発想はしにくいけれども、若い人には是非、こういう現状が地球上にあるということを伝えて、そして彼らがそういう視点をそういう国で学びながら、日本を見直していく、そういうことが必要だと思います。

もう一点。日本で虫歯がたくさんある幼い子というのは、実は育児放棄とか、虐待をまず想定しなければいけません。そうでない子は、だいたい健康です。ですからその子どもの育児背景にきちんと目を向けながら医療の問題を考えなければならない。

私はこの間、2歳児の検診に行ったときに、お母さんといろいろ話をしていたら、最後に捨て台詞のように「私、本当はこの子を産みたくなかった」と言って帰っていって、そこで私は次の言葉がなかったという現実がありました。以上です。

田中／私の今回報告させていただいた部分から、先ほどの概念定義の「開発型福祉」というところで、今、考えてみました。私たち自身がまだ取り組み出したところなので、正直申し上げまして、地域にいらっしゃる障がいをお持ちの方、そうではない方も含めた、働く場所とか、何らかの形でお金を稼ぐ手段ということがまだまだ不十分かなと思っています。社会問題が処理される程度で言っても、まだまだ処理されている過程ですので、そもそもこれを論じられるところまでは行っていないのかなと思います。

ニーズに関しても、今現在私たちがお付き合いしている方たちのニーズというものの把握はできているのかも知れませんが、必ずしも村全体に関するニーズというものがちゃんと私たちが把握できているかというと、ちょっとまだそうでない部分も多いので、こんな所も考えていかなければいけないのかなと。

機会が与えられる程度と行ったところでも、現状ではどの程度そこができているのかなと言うと、まだまだ不十分なところが多いと思っています。

ただ、思ったのは、制度が整ってきているというのは、確かに今の世の中には当然あるのでしょうが、どうしてもこういう仕事をしていると、その制度に乗っけちゃおうという気持ちが長くやっていると出て来てしまって、何かの制度に引っかければ何とかできるのではないかとついつい思いがちで、目の前にいる何の何々さんが何に困っているのかを見る前に、何の制度に当てはめたらよいのかを考えるようになっています。どうしても長くやっていると、出てきてしまいます。

今回はこういう就労の問題を扱うに当たって、村の中にいる何の何々くんや何の何々さんという個人の方々とお話をしていく中で、やはり就労という問題とかいろんなことを考えるとき、「障がい者の方」という括りをするのではなくて、山形村のどこのどこに住んでいる何の何々さんが、何に困っているのかをちゃんと考えてやっていかなければ、先程の開発型福祉というところも、うまくいかないんだろうなと、思ったりしているのを、ちょっと今、先生のお話を聞きながら考えました。

まだまだ、5年かかるか、10年かかるかわかりませんが、5年後、10年後で、今私たちが山形村の中でお付き合いする10代の方が、20代30代になるときに、障がいが重くなっても軽くなっても、自分の家で生活しながら、自分の部屋に寝起きができる方が増えれば、今の私たちの取り組みが、それなりの形になってきているのかなというところを考えながらでも、これから少し頑張っていきたいなと思います。以上です。

六井／先ほど地域ということに、ひろばを通して見た地域ということの話をしました。例えば障がいのある方の就労にしても、一番の基礎にあるのは地域に住む人たちの交流から生まれるお互いを認め合う心が一番の基礎になると思うのです。そういうものがないと、なかなか就労という問題も、規則の中では発展できるかもしれないけれど、あるところに行くと、躓いてしまうような気がするわけです。

地域の方たちは理解が進むと高齢とか、障がいとかというのも、とっぱらえるが、そういうことを規程に当てはめたいのが、社会・介護福祉士とか、そういう専門職であったような気がします。

これからは地域を見る人を見るという、是非、専門職の働きをする方たちが大勢出てくればいいなと思います。福祉ひろばというのは、一番底辺の人たちの宝物がいっぱい転がっている場所ですので、そちらにこまめに交流の日におでかけいただいて、幅広い活動ができるように願っております。以上です。

笹井／松本市で年間、車による交通事故はだいたい年間9300件くらい。１日にだいたい25～26件くらいが、どこかで事故が起こっているわけです。いずれ年齢が高くなることによって、我々は車が動かせなくなる。そうすると、社会からちょっと一旦途絶するというか、外に出られないということで、県も松本市も公共交通ということをテーマにはしておりますが、ちょっと私が見る限り継続性がない。そうすると足の確保をしないで、世の中にやはり参画できないと、福祉以前に家の中に閉じこもることが出てきますので、単純にお金をかけて、フランスから車を入れて来て、ただ走らせればいいという、そういう簡単な問題ではないので、今から５年計画くらいで、やはりそれも大きな足を確保する意味での福祉だと思います。

やはり稼ぐ場所も必要ですし、稼ぎ出してくれる場所がなければいけない。松本市も外へどんどん稼ぎに行って、その収益がないと、地産地消、この中で動かしていくと、それ以上のものは生まれてこないので、そのような運転、また是非活発になってくれればいいなと思っています。

高田／私のほうでは、進歩の機会が与えられる程度というところで、私もこれから新しいものについてチャレンジしていこうと思っています。

皆さんも福祉というと、最初にコーディネーターからお話しがあったように、施設とか、そういうところで仕事をするというのがどうしてもメインになるかもしれませんが、皆さん、これからいろいろなチャレンジ、機会が与えられると思います。その機会にどんどんチャレンジしていっていただいて、施設ばかりではなく NPO にしても、何にしてもそうですが、いろんな関係で福祉というものに関わっていかれると思いますので、可能性がありますので、これからどんどんチャンレンジしていっていただければと思います。

以上です。

村岡／それではコメンテーターということで、先程尻無浜先生の方から私の発言ということでご紹介いただいた「制度は今に間に合わない」。過去のニーズに基づいているというのは、制度が悪いという意味ではなく、制度というのは、何が必要かというのは、今検討して、例えば法律にするとしたら国会で審議するとか、時間がかかるわけです。ということは、制度ができたからそれに従って仕事をするという視点を私たち事業者が持っていると、もしかしたら今に間に合っていないというそういう認識が必要だと思います。

そんな意味で、何が問われているかというのが、まさにこの実践だと思います。実践というのは、やはり今に間に合うものであり、今しなければならないことであり、今日、３名の方から話題を提供いただく中で、私自身が感じたことは、まず村居

さんのご発言の中から、実践から何かをしようとする中で、そこに提供者の視点が入ってくる。その場を見るだけでなく、回り、つまり環境を見ることの大切さをご指摘いただいたと思います。つまり、どのように関わっていくのかという、介入の視点をご提示いただいたのかなと思います。

それから田中さんのご発言の中で、鴨の飼育の話があり、これは学生さんたちからすると、福祉の仕事かというイメージがたぶんつきにくいものだと思います。地域で福祉をやっていくということは、まさにこういう事ではないかなと思います。そういう中で、何をするのかという、まさに発想の視点をというのを、教えていただいたのかなと思います。

村居さんのお話と田中さんのお話の中に共通するものがあるとすれば、まさに実践というのは、実践する前に想像していることよりも、実際に現場に行ってみると、そこで必要とされているものは実はちょっと違ったものだとか、もっと先の物があったとか、もっと手前の物があったとか、そういうダイナミックなものがあるのではないかという、そういうことだとか思います。

ただ、そこにいかに焦点を当てて行けるか、つまり柔軟な発想を持てるかということが、私たちに問われているのではないかと思います。

それから六井さんのご発言の中で、「人材育成」ということをよく言われているのです。地域福祉の担い手とか、福祉人材育成とか。ただそれを地域の人が自分がどう育っていくのかという趣旨でご発言いただけたというのは、私にとっても勉強になりました。

そうしたときに事業者とか学校は、一体何をしなければならないのか。そういう意味で担い手の視点。介入の視点。それから発想の視点。そのような 3 つの視点をご提示いただいたのかなというふうに感じております。

改めまして、福祉実践のすそ野は、制度ではなく福祉実践のすそ野というのは、様々な課題というのは当然はらんでいますけれども、そのすそ野は確実に広がっているんだなというのは、改めて感じました。特にソーシャルビジネスという切り口というのは、まさに今見逃せない切り口ではないかと思います。もはや福祉実践というのは、福祉援助の必要な方々を支援していくという、ある面ではステレオタイプな画一的な、そういう見方だけではなくて、特に田中さんのお話の中で、お金の視点が重要というご指摘がありました。これはまさに経営の視点だと思います。経営の視点を含めて、もっと広いお互いの生活の質を高めるようという実践に他ならないのかなというふうに感じています。

今日、一通り話を聞く中で、福祉の仕事というと何か難しいような、何か力んでやらなければいけないようなイメージも結構あるかと思いますが、実は大事な視点というのは楽しさなのかなというのも、若干感じました。そういうことを考えながら、まさにタイトルにあるような、福祉改革という福祉実践というもののすそ野を広げていくことができれば、これからは非常にいいのかと感じました。

以上です。

尻無浜／ありがとうございました。

会場の皆さん方から十分にご質問をお受けできないままに、予定した時間よりちょっと過ぎてしまいました。大変恐縮でした。

最後に、閉会の挨拶として松本大学観光ホスピタリティ学科の白戸より挨拶申し上げます。

白戸／今日、ご登壇いただきました皆様、あるいは長時間お聞きいただきました皆さま、ありがとうございました。本当に、良い会になったと思います。

私共、松本大学は、8 年前にちょうどできました。2 サイクル終わったところです。8 年前に作ったときに、地域の若者を地域で育て、地域に返すということをコンセプトで立ち上げたときに、当然のことながら、福祉はどう扱うのかという議論がありました。そのときには、県内には社会福

祉士を養成している他大学がある。それからある種、もしそういうことでうちがやるとすれば、そんなに多くの人数を養成するわけにはいかないので、少人数になるだろう。その中でもう１つ、今日も出て参りましたが、なんとか「士」と付くとすぐ威張ると。そういう若者を果たして育てていいのかという議論があって、見送った経緯がございました。ちょうど４年前に観光ホスピタリティ学科を立ち上げる際に、やはり社会福祉士を育てようという判断を致しました。その判断は、少人数であっても、これからの福祉に対応するような人材を、やはり地域に送り出していく必要があるだろう。もちろんそれは、ほかの大学さんがやっているようなことではなくて、まったく新しい切り口で、今まである福祉をさらに発展させるような、そういう人間を育てて、送り出したいということで実は始まりました。

私は昔、土木業のコンサルタントということをしていました。福祉を外から見ていて、土建業とそっくりだなと思いました。補助金頼みであり、制度をすぐにいじると。本当にそっくりです。福祉の体質は土木業とそっくりです。公共事業どっぷり。そういう物を変えていくということも１つありましたし、今日の話の中で、地域を本当の意味で、地域という言葉だけでなく、その地域の本当の日常の中で、感性として地域を理解して、人と人をつなぐようなそういう子たちを育てていきたいというのが２つ目にありました。

同時に今日のお話を聞いていてすごく感動したのですが、実践の裏にきちんとした理念とか、理論とか、将来への見通しというものがきちんとあって初めて、実践というのは定着していくとすれば、そういうことを考えられる人間を育てたいということで、20名ばかりではありますが、大学の経営的には大変な負担なのですが、やはり地域にそういう子たちを送り出してやりたいということでやってきました。

障がい者就労、あるいは、今日はちょっと取り上げられませんでしたがユニバーサルデザイン、アクセッシブルツーリスト、障がい者、高齢者のための旅行ですね。そういう、新しい分野を専門に、専門性を持つような若者を育て、何よりそれをきちんと感性を磨いて、単なる知識だけでなく、経験の中で初めて培われる知恵、現実の中でどうしたら良いんだということができる、そういう若者を育てていきたいということで、実は４年間。特に今日いる尻無浜先生は大変な苦労をかけながらやって参りました。

幸い１期生がこの３月18日に卒業して、巣立っていきます。多くの学生がおかげさまで、相談職、生活支援指導職ということで、採用していただいています。彼らと一緒に、これからこの地域の福祉をどう作っていくのかというのが、次の我々の課題になりますし、また今後とも、今日お集まりの皆さんには是非ご協力をいただきながら、良い人材を育てると共に、地域と一緒に、地域の福祉を育てていきたいな。あるいは我々自身も育てられていきたいと思いますので、今後ともまた、よろしくお願いしたいと思います。

長時間にわたり、本当にありがとうございました。これでシンポジウムを閉じさせていただきます。皆さん、どうもありがとうございました。